

談話室

教養課程雑感

最上英明

「一般教育研究」誌の趣旨に多少なりとも沿えますよう、大学の一般教育に関する私自身の経験に基づいた感想など、あれこれ書かせていただこうと思います。

大学生活自体が、社会に出る前のモロトリアムの期間であると言われますが、特に受験戦争と言われる日本においては、専門課程に移行する前に一般教育を受ける教養課程は、月並みな意見ではありませんが、より一層モロトリアム的な性格を有していると言えるでしょう。一般社会が認めるかどうかは別にせよ、教養課程の存在意義は、その点だけでも十分に評価されているように思います。ただ問題は、学生がその期間をどれだけ自らの人生の充電期間として活用するかどうかでしょう。

本誌第36号の石川先生や第38号の川瀬先生が教養時代をどのように過ごされたかについて書かれた文章を読ませていただきますと、さすがに充実した学生生活を送っておられたことがわかり、興味深く拝見させてもらいました。私は山形大学で教養課程を過ごしました。文科系学部に入學した以上、外国語が出来なければ話にならないのですが、英語が不得手でしたので、大学で初めて学ぶドイツ語だけは落ちこぼれないように気をつけながら、かなりのんびり過ごしました。人文学部というところに入學したものの、まだ何を専門にするかはつき

り決めていなかったもので、これまた月並みながら、あれこれの分野の本を読んだりしました。当時はもちろんドイツ語学を専門にするなどとは思いませんが、ドイツ語に関しても、仙台の丸善あたりでニューチェの「ツァラトゥストラ」やハイデッガーの「存在と時間」の原書などを買ってパラパラと眺めて喜ぶミーハー学生でした。2年の前期にはフランス語の授業もとり、夏休みには神田でサルトルの「存在と無」の原書などを買ってきて、書棚に飾って（だけ？）いたりしたものです。一般教育の科目に関しては、何とか単位が取ればいいという怠け者でしたので、成績はあまり誉められたものではありませんでした。ただ個人的な意見としては、大学の教養課程では成績云々に汲々とするより、トーマス・マンやドストエフスキーなど、文庫本で数冊に及ぶ本をのんびりと徹夜で読んだりする方が有意義なのではないかと思っています。

ついでに触れますと、高橋先生が本誌第32号で書いておられましたように、中央の文化に接する機会を積極的に持つことも、地方大学に学ぶ学生にとっては必要であると思います。その後、ウィーン、パイロイト、ベルリン、ミュンヘン、ハンブルク、ブリュッセル、バルセロナなどでまで見るようになったワーグナーの楽劇も、実際の

舞台上に初めて接したのが教養時代、東京での二期会による「ローエングリン」「マイスタージンガー」の上演でした。今は亡きカラヤンも教養時代に初めて東京に聞きに行きました。展覧会でも当時は、セゾン美術館になる前の西武美術館によく出かけ、エゴン・シーレ、荒川修作などの展覧会はまだ記憶に残っています。エゴン・シーレは後年ウィーンで再会しましたが、荒川修作はこの秋、徳島の文化の森や名古屋でも見る機会があり、そういえばどこかで見たことのある絵だなと思ったものでした。

さてまた大学の一般教育に話を戻しますと、人文・社会・自然科学の科目の講義をいろいろ聞くことにより、幅広い分野の学問的態度というものに接することの出来るいい機会だともいえるでしょうか。ここで教養課程のないドイツの大学に関する私の体験について若干書かせていただきます。私は人文系の学部しか知りませんが、学生が大学に入学すると、まず教授の講義と初級の演習に出席します（外国語はもちろん選択）。ドイツでは講義をするのは教授だけで、あとの講師や助手は演習だけを担当。講義は初心者にも理解できるような明快な導入から始まりますが、上級の学生も顔を出しているのです。内容的には含蓄があるものと言えるでしょう。ところで面白いのは、ドイツではこうした講義は、いくら出席しても単位にはならないのです。単位が取得できるのは演習だけ。それでも有名な教授の授業では、講義室が一杯になるのは周知の通り。

「時制論」「言語とテキスト」の邦訳もあるミュンヘン大学のヴァインリヒ教授は、人気教授の一人ですが、ドイツ語のテキスト文法の講義を我々外国人にはお馴染みの

枠構造の概説から始め（外国人は枠構造などの文法からドイツ語を勉強し始めるが、自然にドイツ語を話すドイツ人は文法を習って初めて枠構造を意識する）、日常会話ではanrufen（電話する）、anfangen（始める）、aufhören（終える）のような分離動詞を用いる方が、それぞれの外来系の非分離動詞telephonieren, beginnen, beendenを用いるよりも断然頻度が高いことから、ドイツ語の日常会話ではいかに分離動詞が好まれるかを説き起こしていました。

ミュンヘン大学在学中には、専門のドイツ語学の授業の他に、それこそ一般教養のつもりで音楽学の講義も勝手に聴講したのですが（もちろん講義では出席は取らない）、私の聞いたある教授の「バッハのコラールとフーガ」という講義は、専門知識のない私でもある程度は理解できる明快な内容でした。最初の講義の時間に、あるピアノ曲をいきなり教室に流し始め、みんながバッハなのかと不思議に思っていると、実はメンデルスゾーンの「前奏曲とフーガ」。しかしメンデルスゾーンではフーガの最後にコラールが付いている点ですが、バッハにはないロマン派時代の産物。バッハはフーガとコラールを一つの曲で一緒にしたことはなく、まったく別々のジャンルの曲として作曲したという指摘をしてから、コラール、フーガの順にバッハの作品を半年間講義していくという、毎週音楽（時には実演）も聞ける楽しい授業でした。

最近の新聞の投書で、大きな大学の大講義室での講義最中の学生の私語のひどさに関するものを見かけますが、やはり勉学意欲のない学生に対しても、講義で強制的に単位を取らせようとするのが問題なのではないかと思えます。講義はそれを本当に聞きたい

学生だけが、単位などに拘束されることなく聴講できるようにすれば、教官にも学生にも有益だろうと思います。もちろん外国の方式をそのまま真似すればいいと考えている訳ではありませんが、仮に単位が出るのは小人数の演習だけにすれば、お互いに実りある成果が得られるのではと思います。外国語でも当然ながら、小人数授業の方が効果があるでしょう。それはさておき、幸いなことには、香川大学では一般教育にも

演習科目が数多く設置されており、この点はさすがと敬復しております。演習科目の充実が、今後の大学の一般教育の柱の一つとなりそうな気がするだけに、大変心強く思うと同時に、私自身も多少なりともお手伝いできればと思う次第です。

以上着任後まだ間もない一新米教官の粗雑な雑感ですので、自分勝手な思い込みなど稚拙な点が多々あろうかと思いますが、ご容赦下さいますようお願いいたします。